

3. 災害から復興まで

豊丘村豊丘中学校三年 E・H

あれは、中学に入学して、まもない、六月二十六、二十七、二十八日のことだった。

その日は、すごい土砂降りで、皆びくびくして、勉強していた。すると、緊急放送があり、

「今降っている雨は、これから、ますます、強くなる恐れがあります。」

と連絡があったので、授業を中断して、部落ごとに、かたまって帰ってきた。家に帰っても、やみそうもなく、なお降り続けていた。父母は、水の捌け口を、捌けを良くしていた。

夕方になっても、なお降り続けていた。河原の人達は、天竜川の増水で、堤防が、切れそうになったので、土砂降りの中を、私の家まで、避難してきた。

夕食は、河原の人達と、一緒だったので、大へん力強かった。夕食後、少したつと、ズズズズ、ドッシャーんと、すごい響の音がした。今まで、聞いたこともない音だったので、今でも、耳から、離れることができない。

次の日に、わかった事だが、そのすごい音は、十五メートルにもおよぶ、山くずれだった。

この夜は、おびえてしまつて、なかなか、眠れなかった。うろろうろとしていると、家の中が、がたがたしたり、有線放送で、しきりに放送していた。

「古畑部落は、山崩れの恐れがあるから、避難して下さい。」

との連絡であつたので、ローソク一本の暗がりの中で、ズボンをはいて、家の人達と、一列になって雨の中を、あぶ川の親類へにげていった。

夜は、あぶ川が切れるとか、天竜川の堤防がきたとかで、夜中中、消防団員は、もちろん、一般の人達も、一睡もできなかった。その時、私の家の田んぼは、全部流されてしまった。

翌朝、私は、このことを耳にして、悲壮な思いで、これから、どやって生活していけば良いのか、とほうにくれてしまった。

それから、天竜川の、はんらんの後を見に行った。沢山の濁流が、ものすごいきおいで、ゴウゴウと流れていた。そして、堤防が切れ、以前家のあつたところへも、水が、すごい勢いで、流れていた。その時私は、水の力は、たいへん恐いものなのだなあとつくづく感じた。

あれこれしているうちに、雨が止み、晴れてきたので、家に帰ってきた。

次の朝、古城へ、ヒバリがいった（地われがした）といううわさが流れたので、再びあぶ川の親類へ避難したのだが、それは、流言飛語であつた。

そのうちに、あぶ川が切れそうだと言っていたので、今度は家にもどつてきた。

あれこれと、色々の心配をしたが、災害の結果は、無残にも、堤防が切れたため、田畑、人家が流され、そして、土砂くずれがあり、そして又、尊い人命までも奪つていった。

私の家は、七反歩の田んぼが、後影もなく白河原になつてしまった。流され

た時、私達子供には、寂しく、つまらない気持はあつたが、さほど悲しまなかつた。しかし、おとなの人達は、家族を養つていかなければならない義務から、本当に、真剣な問題であつた。そして、田んぼは、流された人達同志で、相談して、田作りを計画した。

それから、半月ばかりして、復旧工事が、着々と進められた。土方の人達が、ダンプカーで、山から土を運び、私の知らない間にできあがつてしまつていた。私はその早さに驚き、機械化の進んだことに、感謝した。

でき上つた田んぼは、今までのと違い、碁ばんの目のようになり、川も道も広くなり、合理的になつた。

「災害は、忘れた頃に、又、やってくる」という、ことわざのように、再びこのような災害にであわないようねがい、又、皆で対策を考え、大きな災害を防げたら、どんなに安心して、暮せることでしょう。

(三十八年)